

正倉院の鷲連珠文錦について

Etsuko KAGEYAMA
影山悦子

はじめに

正倉院に伝わる多数の絹織物のうち、本稿では鷲連珠文錦わしれんじゅもんと呼ばれる錦を取り上げる。連珠円の中に鳥を表す錦は珍しくないが、多くは向かい合って立つ二羽の鳥を横から見た姿を表す。鷲連珠文錦は、翼を広げた一羽の鳥を正面から見た姿を表し、鳥の腹部が円の中心を占める。鳥の腹部には何かが表示されているように見えるが、判然としない。本稿では、中国の新疆ウイグル自治区トルファンや青海省せいかいしょう都蘭とらんの墓などから出土した類似の文様を表す錦と比較し、正倉院鷲連珠文錦の文様について再検討したい。

1. 正倉院の鷲連珠文錦（図1）

正倉院の鷲連珠文錦の文様については尾形と大山による研究があり、文様の復元図が作成されている（図2）¹。連珠円内の文様は左右対称で、翼を広げた鷲のような猛禽が中央を占め、左右の翼の上方には向かい合って立つ鳥を表す。紫地と赤地の二種類があるが、基本的に同じ文様を表す²。頭上に蓮華様の冠を被り、首元や胸には宝玉や垂飾すいじょく帯たいを飾るとしている。連珠円の直径は約10センチメートルで、上下左右に重角文じゅうかくもんを表す。円文の外側には重角文を中心とするバルメット文³を表す。緯糸で文様を表出する緯錦よこにしきであるとされる。

紫地鷲連珠文錦は屏風や古裂帖に装丁された状態で伝わるが、赤地の方は当初のまま、幡の脚先の飾りとして今日まで伝わっている。



図1：正倉院赤地鷲連珠文錦
[正倉院事務所 2000, 図録 no. 93 (注1前掲)]

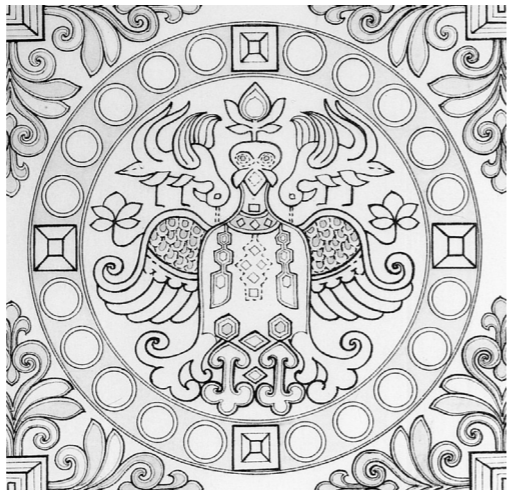


図2：正倉院紫地鷲連珠文錦（復元図）
[正倉院事務所 2000, 文様復元図 no. 5 (注1前掲)]

大中小の3種類に分けている。円文の直径が10センチメートル前後のものは中連珠円に分類され、それらは経糸で文様を表出する経錦^{たてにしき}であるとする。経錦は中国固有の紋織技法であり、これらの錦が中国で生産されたことが知られる⁵⁾。

連珠円の直径が10センチメートル前後のトルファン出土錦は経錦とされるのに対して、正倉院鷲連珠文錦は緯錦であるとされている。緯錦は西方から中国に伝わった技法であり、技法から正倉院鷲連珠文錦を中国製錦であると判断することはできないが、連珠円の四方に重角文が配されていることや、連珠円の間にも重角文を中心にパルメット文を表すのは、中国製錦に見られる特徴である。そのため、正倉院鷲連珠文錦は中国で生産された錦であると考えてよいだろう。以下では正倉院鷲連珠文錦の文様をより良く理解するために、トルファンや青海省都蘭などで出土した鷲文錦について検討する。

2. アル・サバーハ・コレクション 鷲連珠文錦 (図3)

最初に挙げるのは、2014年に発表されたクウェートのアル・サバーハ・コレクション (Al Sabah Collection) の鷲連珠文錦である⁶⁾。出土状況は不明であるが、アフガニスタン北部サマングンで見つかったとされる。3点の断片 (a, b, c) から成り、図3は断片bの写真である。連珠円内の文様は左右対称で、両翼を広げた一羽の鳥を表す。



図6：ペルム出土銀器
Image is used from www.hermitagemuseum.org, courtesy of The State Hermitage Museum, St. Petersburg, Russia

この幡は天平勝宝9歳(757年)5月2日に営まれた聖武天皇一周忌齋会で懸吊された道場幡の一旒^{いちりゅう}であることが明らかにされている⁴⁾。したがって、赤地鷲連珠文錦は8世紀半ばより前に制作されたことが知られる。

正倉院鷲連珠文錦のように直径10センチメートルほどの連珠円内に左右対称の文様を表す錦は、トルファンのアスターナ墓群やカラホージャ墓群から数多く出土している。トルファン出土錦を技法と文様によって分類した坂本は、連珠円内に文様を左右対称に表す錦を「連珠円内対称文錦」と名付け、さらにそれらを円文の大きさによって

頭頂には木葉形のものを立て、その下方に一对の鳥の翼の形をしたものが見える。嘴から真珠の飾りを垂らしているのだろうか。首の左右に六弁の小さな花を表す。尾を扇状に広げ、両脚を下に伸ばしている。丸みを帯びた腹部の左右には黄色の楕円形の部分があり、腹部中央にも上下二箇所黄色の部分がある。下はしずく形で、上は次に挙げるカラホージャ出土錦に見られるように、円の四方に小円を表したものかもしれない。翼の上方には向かい合って口を大きく開けた一对の獅子を表す。円文の直径は約20センチメートルである。解説者は、頭頂にとさかの表現を認め、それと尾の特徴から、この鳥を孔雀とみなしている。またこの錦に表された獅子を、法隆寺の四騎獅子狩文錦^{もんきん}の獅子と比較している⁷⁾。そして中国または中央アジアで織られたサミット (samit) と呼ばれる緯錦であり、放射性炭素年代測定の結果をふまえて、6世紀から7世紀に制作されたと推定している。

解説者は、連珠円内の鳥を孔雀とみなすが、本稿に挙げる他の例と同様に鷲のような猛禽類を正面から表していると考えてよいだろう。また、法隆寺四騎獅子狩文錦との共通点を指摘するが、獅子だけでなく、鳥の翼も四騎獅子狩文錦の天馬の翼に酷似する。

この錦の特徴は、直径20センチメートルもある連珠円内に左右対称の文様を表し、円文は正円に近く、歪みがないことである。このタイプの錦は、中国で製作された最高級のサミットであり⁸⁾、日本には上述の法隆寺四騎獅子狩文錦の他に、正倉院に犀連珠文錦^{さいれんじゆもんにしき}が伝わる⁹⁾。同じタイプの錦の断片が、トルファンのアスターナ墓群でも複数発見

されている。上述の坂本によるトルファン出土錦の分類では、「連珠円内対称文錦」の大連珠円（20センチメートル前後の大きさの連珠円）の緯錦にあたり、墓誌から埋葬年代が分かる3例は、いずれも7世紀半ばの墓から出土している¹⁰。

3. トルファン・カラホージャ墓群出土鷲連珠文錦（図4）

次に挙げるのはトルファンのカラホージャ墓群から出土した鷲連珠文錦である。20世紀初頭に中央アジアを踏査した大谷探検隊が将来し、現在は旅順博物館が所蔵する¹¹。錦のサイズは縦24センチメートル、横21センチメートルで、円文の直径は35センチメートルほどになる。錦の裏面と周囲に平絹が縫い付けられており、面覆いとして使用されたことが明らかにされている。解説者は緯錦であると推定している。

連珠円内の文様は左右対称で、両翼を広げた鷲が表現されている。鷲の頭部から首にかけての描写はアル・サバーハ・コレクションのものと同様に近い。頭頂には木葉形のものを立て、その両側には鳥の翼のようなものが見える。頭頂の飾りの左右に見える六弁の花はアル・サバーハ・コレクションの鷲の首の両側に表されているものと同じである。同コレクションは両翼の上方に獅子を表すが、この錦では獅子は表されていない。欠損しているため断定はできないが、女性の頭部（細いリボンが左右に広がる）と上半身が表され、片手を挙げて、鷲に

メートルである。8枚の花弁で囲まれた円の中に翼を広げた鷲を表す。円内の文様は左右対称ではなく、鷲の頭は左を向いている。鷲の腹部には正面を向き両手を挙げる人間の姿を表す。人間の臀部の両側に伸びているのは鷲の脚で、鷲が両脚で人間を抱えている様子を表そうとしたものだろう。

解説者は、この錦は8世紀に生産されたサミットで、織技は西方（ビザンツ）のものに近いとする。上で挙げた3点の鷲連珠文錦とは異なり、都蘭で出土した鷲文錦は中国以外の地域で生産されたと考えられる。坂本のトルファン出土錦の研究では、連珠円内の文様が左右対称ではない錦は「連珠円内単独文錦」に分類され、イラン文化圏で生産されたとしている。

都蘭出土錦の鷲は頭を横（現存する部分では左側）に向けている。上で挙げた図6のササン朝ペルシアの銀皿の鷲と比較すると、どちらも、嘴は鉤形に曲がり、後頭部には動物の耳のようなものがあり、両者の類似に驚かされる¹³。都蘭出土鷲文錦はイラン文化圏で知られていた図像をもとに生産されたのだろう。

5. 正倉院鷲連珠文錦の文様について

以上、正倉院の鷲連珠文錦と同様の文様を表す3種類の錦を見た。正倉院とアル・サバーハ・コレクション、カラホージャの錦は、文様

しづく形のを差し出ししているように見える。鷲の腹の上部には二重円を表し、その四方に小円（真珠）を付ける。その下には鷲の脚が上向きに表され、先のとがった白い爪が見える。脚の付け根の周りの巻毛の表現は、法隆寺四騎獅子狩文錦の獅子のたてがみの表現に近い。

ところで、ウラル山脈西麓のペルムで出土したササン朝ペルシアの銀皿に、両脚で女性を抱えて飛び立つ鷲を表すものがある（図6）。この銀皿については後で述べるが、カラホージャ墓群出土鷲連珠文錦も、鷲が女性を連れて飛び立つ様子を表しているのではないかと思われる。銀器の女性は右手を伸ばして鳥の嘴の前に三角形のものを差し出している。カラホージャ墓群出土錦の女性も同じ動作をしているのではないだろうか。連珠円内の文様が左右対称で、円文の直径が35センチメートルと大型であること、アル・サバーハ・コレクションの鷲連珠文錦や法隆寺四騎獅子狩文錦と文様に共通する点があることから、こちらも中国で生産されたサミットかもしれない。

4. 都蘭墓群出土鷲文錦（図5）

最後に挙げるのは、1983年に青海省都蘭の吐蕃^{とぼん}の墓群から発掘調査によって見つかった鷲文錦である¹²。断片のサイズは、縦18・1センチメートル、横18・9センチメートルで、文様の直径は約18センチ

の特徴から中国で制作されたものだと考えられる。一方、都蘭の錦は中国以外の地域で、イラン世界で知られていた図像をもとに制作された錦であると考えられる。もともと中国に鷲を正面から表す図像は存在せず、イラン世界で知られていた文様が東方に伝わり、それを模倣した錦が中国でも織られるようになったと考えられる。

ここで、正倉院の鷲連珠文錦の文様をもう一度見てみよう。筆者はかつて、正倉院錦の鷲の腹部にも都蘭の錦のように人間の姿を表そうとしたが、うまく表せなかったのではないかと考えたことがある¹⁴。しかし、筆者が人間の顔ではないかと思つた上部中央の丸い文様は、正倉院紫地鷲連珠文錦の復元図に破線で示されている垂飾帯、もしくはアル・サバーハ・コレクションやカラホージャの錦に見られる四方に真珠をあしらった飾りのようなものであると考えるべきかもしれない。また、アル・サバーハ・コレクションの錦と比較すると、尾の前に爪のある脚を下ろしているのが見て取れる。さらに、同コレクションの錦では、脚の付け根の上方に楕円形の文様が表されており、正倉院の錦にも同様の表現がなされていたのかもしれない¹⁵。

古代アジアにおいて女性を抱えて飛び立つ猛禽を表す図像には2つの系統がある。一つ目は、上で挙げたササン朝ペルシアの図像（図6）で、猛禽の頭部に動物の耳のようなものがあるのが特徴である。銀器の他に印章や封泥にそれを表したものがある¹⁶。二つ目は、インドのガルーダの物語を表すもので、ガンダーラの石彫像やウズベキスタン南部のザルテパ遺跡出土壁画に認められる¹⁷。嘴に蛇をくわえるのが

特徴で、女性の姿で表されたナーガ／ナーギー（蛇神）に対するガルルーダの勝利を表すとする解釈の他に、釈迦がガルルーダ（金翅鳥）の王であったときの前生物語であるスサンディー・ジャータカ（Susandhi-ataka）を表しているとする解釈もある¹⁸。本稿で取り上げた錦には蛇は表現されず、猛禽の頭部に動物の耳のような表現が認められることから、鷲文錦の図像はササン朝ペルシアの系統に属するものだろう。ササン朝の図像はどのような神話をもとにしているのか、これまでに多くの研究者がこの問題に取り組んでいるが、いまなお解決には至っていない¹⁹。

おわりに

本稿では、ササン朝の図像が錦などを介して東方に伝わり、それを手本として中国において鷲連珠文錦が制作され、それが日本にもたらされていたことを確認した。このことは、現存資料は限られているものの、イラン世界において女性を抱えて飛び立つ鷲の文様が吉祥文として広まっていたことを示している。図像が表現している内容の解明がますます重要なものとなっている。

【註・参考文献】

- 1 正倉院事務所（編）『新訂正倉院宝物染織』上、朝日新聞社、2000年、図録 no. 93、文様復元図 no.5, p.35（尾形）、p.56（大山）；大山明彦「正倉院の染織品の文様について」文様復元図の作成『奈良教育大学紀要人文・社会科学』50-1、2001年、pp.75-90、復元図の破線は推定による復元であることを示す。
- 2 赤地の方が文様の寸法が一回り大きく、また文様表現にやや硬さが感じられること：大山2001、p.79（注1前掲）。
- 3 扇状に広がったナツメヤシの葉を図案化した文様。
- 4 尾形充彦「正倉院の大幡」『正倉院紀要』18、1996年、pp.41-70、図版1-19、口絵図版2
- 5 坂本和子『織物に見るシルクロードの文化交流：トゥルフアン出土染織資料―錦綾を中心に』同時代社、2012年、pp.35-70。
- 6 F. Spuhler, *Pre-Islamic carpets and textiles from Eastern lands*, London: Thames & Hudson, 2014, pp. 108-111, Cat. 2.3.
- 7 東京国立博物館『特別展法隆寺献納宝物』1999年、no. 110。
- 8 中国で製作されたサミットについては、長澤和俊・横張和子『絹の道：シルクロード染織史』講談社、2001年、pp.183-196。
- 9 松本包夫『正倉院裂と飛鳥天平の染織』紫新社、1984年、no. 38、44の解説文であれば、円文の直径は前者が約45cm、後者が約50cmである。
- 10 坂本2012、pp. 60-61（注5前掲）。
- 11 佐川美術館（編）『絲綢路の至宝「旅順博物館 仏教芸術谷品展」』2002年、p. 111, no. 57, 王振芬による解説。
- 12 J. C. Y. Watt et al., *China: Dawn of a golden age 200-750 AD*, New York, New Haven, London: The Metropolitan Museum of Art, Yale University Press, 2004, p. 347, no. 246, Zhao Feng（趙飭）による解説。
- 13 M. Comparati, "A short note on a so-called *skandar Dhu'l-Qarnayn* in a Bactrian painting", *Parthica* 12, 2010, pp. 95-106. © pp. 102-103, fig. 10; M. Comparati, *The elusive Persian Phoenix: Simurg and pseudo-Simurg in Iranian arts*, Bologna: Paolo Emilio Persiani, 2021, p. 159, fig. 64.
- 14 E. Kageyama, "Newly identified Iranian motif of silk textiles in Shosoin storehouse in Japan"（口頭発表）, 16th Biennial Symposium of Textile Society of America, Vancouver, September 19-23, 2018.
- 15 解説者は、他の鳥や動物の図像と比較し、この楕円形の部分が鳥の脚または翼の関節を表していると解釈している：Spuhler 2014, p. 109（注6前掲）。比較しているのは、法隆寺四騎獅子狩文錦の馬の臀部にも楕円形部分（中で「山」「古」の文字を記す）などだろう。
- 16 印章、封泥の図像は、M. L. Carter, *Arts of the Hellenized East: Precious metalwork and gems of the pre-Islamic era*, London: Thames & Hudson, 2015, pp. 326-329, cat. 91 参照。
- 17 ガンダーラの石彫像の図像は、G. Azarpay, "A Jataka tale on a Sasanian silver plate", *Bulletin of the Asia Institute* 9(1995), 1997, pp. 99-125, キルギスタン 壁画の図像は Sh. Pldayev, M. A. Reutova, "Zhihopis' Zartepa", *Istoriya Material'noj Kul'tury Uzbekistana* 36, 2008, pp. 91-101. © fig. 2; Comparati 2021, fig. 74（注9前掲）『描起図の上の方に蛇が見える』加藤九祐・Sh. R. R. H. H.（編著）『ウズベキスタン考古学新発見』東方出版、2002年、no. 53（写真）参照。
- 18 Azarpay 1997（注17前掲）、Susan Deyi・Jiayataka については、中村元（監修・補註）『シヤータカ全集』4、春秋社、1999年、p. 188-191 参照。
- 19 ヲルム出土銀皿の図像に関する研究は、*Splendeur des Sassanides: L'empire perse entre Rome et la Chine (224-642)*, Bruxelles: Crédit Communal, Musées royaux d'Art et d'Histoire, 1993, no. 74 (B. I. Marshak の解説)；Azarpay 1997（注17前掲）；B. I. Marshak, "The decoration of some late Sasanian silver vessels and its subject-matter", V. S. Curtis et al eds., *The art and archaeology of Ancient Persia: New light on the Parthian and Sasanian empires*, London: I.B. Tauris, 1998, pp. 84-92, pl. X-XIII. © pp. 88-89; Comparati 2010, pp. 100-102（注17前掲）, Comparati 2021, pp. 173-174, fig. 73（注17前掲）参照。



かげやま・えつこ

1972年生まれ、神戸市外国語大学大学院外国語学研究所博士課程修了（文学博士）。専門はイスラーム以前の中央アジア文化史。東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター・特別研究員、奈良文化財研究所・企画調整部・国際遺跡研究室・アソシエイトフェローを経て、2020年4月から名古屋大学人文学研究科・特任准教授、最先端国際研究ユニット「文化遺産と交流史のアジア共創研究ユニット」メンバー。主要論文に「ソグディアナにおける絹織物の使用と生産」『オリエント』45(1), 2002年、「ソグド人の美術に見られるインド美術の影響について」『アジア仏教美術論集』中央アジア1、中央公論美術出版、2017年、訳書にエチエンヌ・ドゥ・ラ・ヴェシエール『ソグド商人の歴史』岩波書店、2019年がある。